六歌仙 [illegible]

中村俊定文庫
文庫 18
311

同しころかれとこやにとし文孝東の
十日ほとありことせん房ふ古きをたつねしく
月のなか白ば子来るみちゆきあさりよう祭
をときむくの子士に侍しておりてあらはい
一瓜ふれにのぞくりへる あ敷日一日
百済仏とおしくに向ぬらとをくほ
捧にをこふりんもとつくりしりふれば初め

一書をあらはしぬるや親の志なれ
ここ語をみることしといかなるしれ
かしこれらにくらぶれば君子の
わざなるを以ハ茶の湯のたしなみ
かくもまた蛇をゑがくに足をそへたる
似たれど序り意は書ぬとぐちに
筆をとれるのみ

寛延四年辛未秋八月日

麦浪散人

奇仙

名月や押合ふ影は六奇仙　麦林

嘆きむしさらさ萩垣　杜菱

影よハ鳥のとまの振舞よく　兎士

間を小されカり見んなの葉　巴青

冬寒くこちらの枝ハあとなくふ　東呈

焼ても薫れ茶に時雨哉　曽呂

ゐるせめさ鹿も加るには染るけ　洞爺

中村俊定文庫

下戸の多からんさゝ川　畔古
菓つきになる柱には惜れけり　楚二
示に佛も嚴しく読抱　茶域
宝家より奴豆磨に婦明く　我幽
宮毒から家さ寒も埀水　九耳
立史も陰に一定吹ふくより　如之
二日灸く艘にもちらく見　東湖
わすれすも志をく居は室も貴　加滌

下総の時は不破吹雲有り　云歩
夢は方に入すく鈴の月　温故
立場に角吹れは郭公幽　於兎
居風呂もつすは佗向豆許　其口
借書にちりく紙吹約請　有雪
裾へ出状も合羽の吹あれも　帆歩
むめく吾ても舟はおく竹　杜十
侍人も招ぬ寄田に菜を摘く　井梧

古童は伽羅のよもまきれや　斗仙

作病の禁に勝る破りあれ　東郭

雪に一家深き捨也　李青

道人は羅葬すて背形く　星艸

まより入る月よしひ里　甫二

あさは孫にやく借て居る　魚呈

折は何不の勝へ百生　呈雨

菜園の仕里は冬のさ罪におく　波友

たとこへ訛うつる女房　草車

京談のおく深きりは渡る人へ　歌隣

足なき日は蛸も酒の香り焼き　兎船

深くへ名は麻りくおもの瀬　南利

冬の價の菜種山吹　胡東

表

こゝぬ杖も月は忘れし　板庇　　麦浪

麻ても這ふ行く庇の端出　　素道

お撲衣のあられく来れ湯に入く　　寸堂

かゝの節も萩に掃なり　　風芝

手足も機ちり霰きゝみ　　花菫

よ摘と和く傍の薬代　　不敢

名残

後から縁喜取秋の月枕乱　　兎士

手紙の雨干に冬しまれ千年　　綿二

めく禁杀く月と手朝や小車　　如之

たりひわすとの読やよれ月　　巴青

隣泊よは蔓ぞ吸さくさまの月　　東星

つとよ凉座も月杖や草氏　　菊茂

寺ゝ取り帆の行破や帰れ月　　曽呂

玉とりの旅泊りやかゝる明月　洞爺

嚢銭は栗字の高也や月の窓　楚二

名月の玉吹おちや豆香崔　茶城

かゝる明月海にさゝしいさかり高栄　戈幽

立まては神を寝ぬや月の窓　雄古

雲にきえきのね楚せさゝふの月　温故

月の楽あるいよ余波の間同ん　素道

光浮い対慄よてし月の影　畔古

残しきあかの月の十三夜　南利

三寝ての枕いおとり後の月　寸壷

月の患窓に折りへい狂涼し　東郭

会をまに扇子さかり居待月　云歩

かゝる家まく歩れやかゝる明月　其口

名月や杖の音も袖香紗　杜十

咄くれ寂も茶遊や窓の月　有雪

行楚くとこ育や治ん月の窓　草車

一ところ柴屋に明しき月見かな　呈艸

洗濯の夕暮ハ敷ぬれの月　井拮

開帳れ月の古跡や杖の下　池希

名月や硯乾く　鳴鳥　如升

茶もや人に踊まぬ月の出　文水

十六夜や隔き雲の結のかり　加條

子猫の香の気性によく居待月　波友

掛待の笛抜まゝり冬の月　湖嶺

静さや庵ろに月の並木　九耳

狐鼻に抗並青く居待月　淺鯉

帰ハ稍に乱り居まち月　又畝

同じくきの黒をうの月見かな　路考

生乃の肌も入るゝの月　亀北

就耳も耳に月影しまふ月　斗仙

山寺の森姿見かりふその月　於兎

名月の舊をよそやめ目印也　茶丈

なかもちやむしへ見し〳〵月夢ぬ　百堂

西露は下に落居を以なの月　李音

茎の葉の露へ映すや宿の月　甫二

月冴る影は柴へ乾田かな　負呈

同経も三井に守たる名の月　桂之

月の夜もおく〳〵待たる萩の花　湖東

初汐は満干もあるに名の月　呈峯

鞠のあと枝にかゝるや宵の月　歌隣

間に〳〵は晩き月見かな　茶也

三星に月の影あり一むしろ　不濃

月には唄ふ行ありき常　帆歩

文台に影を二尺や月と月　呈雨

短冊の古人を友や月の影　兎波

出く人よは端居もなし月の照　兎船

上客を据ゑさせられ名の月　花董

客人は滑く揚なやみの月　聚也

名月や古栖ハ杖の傍はし巫　湛郷

名月の山ハ何所ても青野哉　東湖

月影ハ幸うく石の古にし　倭客

石ふミの獅子に照や今宵月　雨圭

見わすれハ猶ハほしきけふの月　九江

家さくる枕に影やけふの月　涤之

踊取も揺る雲やけふの月　五風

村散の斤頬に落しかな　秋　左推

散雲ハ影さ鳥やこよひ月　里露

こゝの家ハ舟にめぐる影や月の波　風芝

いくもよき绪忘のけふの月　巴石

身ハ老とたまなくハ如くふ此月　楚硯

芦も穂に蔵入くる水泥月　柳下

雲抜く興りしける月　糸汁

稲倒に宿を踊くる今宵月　泉凉

爪音ハ枕も出る如月見くる哉　門弥

名月や鬢のかくれも隠されぬ　亀子
大佛に雲の山路や秋の月　梅雨
月のしらみの冬しくの秋法師　春字
御留は皆白玉や今宵の月　少年 春宵
古郷より秋新しき月見かな　大湊 三喜
わの枝を角としくしくれの月　、芰卜
名月や舟を放せば唄かゝる　、呂由
今宵の月寐転ぶ所しき草枕　、宜志

表

山の膝を押ゝ出る月見かな　浮石
初もみぢ青ハ里の秋風　担人
振袖の後に鏡の菊盛りて　木吾
返事ハ侍るの何の礼やら　味調
よそ引して萱の穂古の歩き　巴朴
露ろの宗鉄寄の正面　秋至

名残

稲の葉も玉まかやけふ此月　入楚

是らハ月ほもてや十五日　巴朴

名月や娘も位居も宗一門　担人

名月此世をあしもよし　漂濵

　木吾

主吏ハ秋此そのあかりもふの月　鴈路

名月や夜をきゆふさ渡しちか　味調

夕きれさやのあしやふ此月　秋至

名月や秋を見るそやそ此の仏　兎柳

名月や立乳むれよりも此名　呈史

月と宵又卵破く〱の声　呉雪

名月や色めく嶋子にまハ知し　羅く

雨ほまく〱もさ枕やふ此月　仙竜

萬の葉も隠さ新居しきふの月　姫住

松かけや登りしもふ此頃此月　氏龍

表

おりたちも隣のいゑやちよの月　麦推

虫の樹も萩の声より尾　市秋

京をもちさ庭の望に秋暮く　芭人

往を枕に旅風名残侍　孤蓮

ちかよりたる一書の葉り果ぬ　帰童

垣根も幕散我の花の雪　杜尺

月の夕懐旧の昨文通のまし記を

名所書わり墨を

塩竃の煙も白し冬の月　市秋

ふれやれつつ掛我春暮月　杜尺

門の草れもい往よし春の月　飯童

入月の字に御我や康の声　孤蓮

裏虫も往捨てぬたりに冬月　一睡

本来にも涅ス京いはれしろの月　濃波

十六夜や咲縁を掃よい写し　芭人

表

彼岸も一むかしなり月の舟　木造
さし入書にはいそかぬ初雁　蝸律
嵯峨籠に芝のんさ菁の露うつし　射石
深き味わい鰯かうおれ　飛泉
糸ひつ人まいハ下駄にあるいの取　高秋
あらう向ても一走れ面々　巴山
名收　執筆

名月に落し舟あり岸の秋　射石
名りや花に居る鳥も捐かゝり　飛泉
きらひしき柳もみえぬ月の影　高秋
懐ぞ言おれ月やこゝろやさ　井関 巴山
添乳しさ子も芋堀やまとの月　巴十
光陰の的に取るや月の影　一色 此呈
名月や帰におされ草の雨　広田 四好
此眼もかゝり草あり月の露　柳士

十六夜やここらの家の新法師　　、虎文

月よりは唯枝なし篠すへ里　　久居 寸霞

羽根のまゝやはにまゐらる月見かな　　津 二日坊

指折て月見も数の一ひとし　　、悦峯

名月や更く行人の影乃影　　、鳥語

名月やハ篠よりも短さし　　、千月

十七夜のまき乾かわし居待月　　桑名 乙架

表

大和

穂こぼれ家ちの秋やまちの月　　古山

雲のくほとそ濱荻露　　史州

弓借を稲さかろしく続けく　　仙畫

鳴まりなん一筋一本　　麦庵

振子よも皆射をね照ヘ来　　春秀

横顔道に夕日くつまし　　胡秋

名残

名月や墨摺りさして明るまど　史良

月一つ近江て散柳かな　仙臺

名月や田毎に名の錦莚　麦秀

名月の空に高鳴し舟のかけ　麦竜

初雁の双紙ふりやう此月　胡秋

惜しさ哉家に戻く月の西之　南為

悪にも雲の晴るる月秋かな　蝶角

表

志良

人はむしろ月は岸より眺めけり　露暁

風よりは男子まつて萩の秀　文蝶

寒れ枝へ坪田ちらし雁の鳴く　和水

浅き夢を醒ます声啼く　秋れ　可及

傘は使ひ濡らしたれ寺の森　之景

柳の露さまし名の　あさきさ　露交

名残

名月や聞く鳥も返く　居　巴州

露よ身をつまても痩をうきの月　野風
痩たく婦麻紙哉や坂の月　只山
山陰の松は暑好や寺ま宸月　和水
世の中も八分や月も十三秋　我舟
村雲の玉吐出やうるの月　至き
名月や見ぬ世の人恋　酔へり　之景
甑写は新涼さましうその月　露文
木ちと舞んく照し板は月　可及

霧の名は瓢も照やまよふ月　文蝶
名月も角く堂をのせるは恋　露暁

仝　参河

抱之は宗阿も照やりその月　麦雪
凧子咲移ゑは芦又月松見し　一湖
蛇倒川ふ芋を喰ゑやうる月　蒸児
朝月や柳田ふ一つ座つるれし　只川
一葉ふつゝ霧をとくれや月は涯　麦二

当村の枝ハちらぬとゝなふの月　杜右

庵の名ゑにも濃く月夜かな　素鄉

こゝろえぬ外ゝも峰や月の友　素菴

須萩の行末に照やこよひの月　如石

ちり空の庵しくれやこよの月　汶水

一葉づゝ柚も細しこよ哀月　一瓢

詠めけの鵜飼さへてしらぬ名月　有鄰

おもしろ取れの山にけ御前月見かな　丈木

全　美濃

名月や取ける山の更け　飛良

唯ここそ錦もつかや里の月　有帆

畑の草も詫しく里の月　立伶

全　山城

宮の日のゆきとみなりゆく名月　大阜

名月や竹不より富士の山　仙行

名月の外よつらぬ我月取かれ　大津　雲裡

東武

明月や千種の露も乾く間と　玉溝

表

守黒庵連中

名月や小僧の目あくほくみ　竹外

雨夜ても亭は躬ゟ　青潮

沖の帆は打来も秋のよ添哉　老梅

笠ゑしう蕎て最もり　花明

拵ては抵さ人にみえきさ栗　栞堂

以も飯に酒盃一彩　古道

名吟

月見や名ある田に池一万　古道

名月や影の葡萄にちらき露　老梅

名月や掃条らぬ雲は落　栞堂

紺屋ハ干場に黒衣月見かな　花明

さゝ波のぬのきりてゆる今宵の月　青潮

表

名月や酒屋の硯の卵　秋瓜

萍は八重も流さその音　左右

うさしに房も一年携て　此筌

祖父のあかぬに牛の行く音　翅白

家猫の米のこほれ果て穂　巨釣

蕣の萩に吹くつゆの影ぬ　朱鳫

名吟

名月や宮は霜なきあふちへ　巨釣

名月や庭の本織も翁の影　此筌

このむかしあらんまゝの月　翅白

名月やとし寄には房の後　朱鳫

あすからぬ遠さ詠くまゝの月　左右

仝

茶坊主は二階を勝やけさの月　楓人

明月に新奥守し後れ髪　三巴

名月や聴と可子千しの奥　卜史

名月や二つ詠めける恋人の程　游光

明月や又頭さき去る夜　芝岸

名月や耽も妻のつくひむし語　李便

法華に落るころや名月　孚風

一姓は噂しぬ京や寺子の月　翠淳

名月や虫の行衛琵琶の音　仙花

菊の葉の並もとしよ名月　雨江

名月や折くい下ふらる　百丈

反橋の影並もしく月見礼　有風

むさし野に人の集るや寺子の月　完山

かぐろきの神楽いやよ名月　雪戸

名月や鳥の翼い兀しくれ　跂良

明月や湖水にさしぬ滝の布　其雄

くらうきはい身にも照やしらその月　女 家人

名月や龍の彼仙小雲原　冬渉
魚中にも萩の影や末の月　飛来
明月や人にそさめる橋乃反　柯涼
名月や隣の人も見ぬ人の事　丞什
瓜小屋も不破てくゝくまの月　百雄
猶息を心の橋や名の月　忍 呈槎
名月や照れ光代に行　一本　、曲全
宵一刀見えてまゝまの月　、瓢尾

仝　常陸

明月や背戸に散くる夜の秀　青郊
名月や淑柱にさゝれ答えし　野亭
芒も雨露空に照るくまの月　加翠
名月や雲の下露い掃く　桟　豆花
桜枝に旅やまりや末の月　市中
玉虫に嘆ぬ荊ありその月　一瓢
名月や波も娘にむれ宮の妃　雨変

三絃の糸も京やまちの月　亀文

帆柱に海も越やこよひの月　麦雨

名月の筆自にやや明の薄　仙雪

團雨ハ読ふ連やいふ乃月　古扇

ちせハ覚の聡やそうの月　之六

名月やいそハ文字の雲そなり　上野 分江

名月や雲の千済の何と宝　遠江 木鈴

表

東武

名月や又年ふ寂もまの人　鳥酔

宵ハ荻に萩の川路　百童

嬉しさハ虫も路に接織く　百卉

聡車の子へ方へ咲ひ乳の緒　深魚

浅茂に落てハ鳴集しさまし水　花光

雲の落いとさめ山茶花　暮江

名所

名月や秋を覚へく此あたり　童牛

初瀬の背にもさやけさよの月　杉雪

雁一つれ渡りけりや今宵此月　加林

名月や四つにならぬも恋し　花溪

月と寄る影ものゆかしけり　百童

食堂に魚の箸ありけふの月　百卉

名月や壁の破も風情下　深泉

泊まるへ人来すとしけふの月　萬江

足あとの橋に流れし今宵此月　花光

名月や運ぶ猿師は山を見る　一鷺

名月や衣桁の襟も噂あし　廿 羽橋

名月や篠薄しき竹の滝　孫雪

草の鞘も見の手招やけふ此月　故舟

打ちよ山も内より竹やこよの月　鳥秋

秋もやしも橋屋の草葉やけふの月　卧遊

庚申の夜猿はおとりけふの月　河長

名月や織戻る滝の幡　沙翁

名月や富士の裾ハ星也けし　芦舟

天ハ空庭をもさえ〳〵の月　巴橋

茅葺の明清ら亦やけふ此月　此君

縁側もうこら寂形しさの月　巴江

名月や鷺ハ眠らく根小舟　呂蓬

名月や杉ハきひしき嶋此孫　東枝

名月やかしましく秋雲此切　前雪

石擣の空ハ高まく〳〵此月　呂京

名月や寄る波の手あり臥　琴舟

名月や背戸の栗山子もきての数　夜笛

名月や野人かうつ秋翁此夢　夜魚

名月や此個の牛も〳〵つ連　数市

名月や寝くあり〳〵く此也　把菊

名月や行尽くすそあ栗粉の猫　如洗

名月や上兄如鷲と照ほまる　乙童

名月や淀の渡へまつ名ハ何　熊耳

名月やさゝら浪の波とある　山鯉

表

名月や茶子露解段む細河すゞ　門瑟

あかしとまつに揺ふ蓬が戸　再蝶

手吹の錦やくこに類へ来らし　蓮朝

賤が身も萬衣様皇　橘下

貝塚の匂ひを罠にさまたり　浣花

明工にゑも争彼家　素木

名所

玉川にゆかしくしけみ月　蓮朝

塩浜の空に志る月見らら　再蝶

名月や雨も停まりくまいり様　松瀾

名月や生れ民の向ひ岸　盈枝

名月や比良れ磯をら嬉一つ　浣花

蜻蛉の羽に秋を知る夜半の月　橘下

名月や晴れ間お帆かけ舟　茶秋

名月や麻に米踏むれの音　素木

仝

かつらきの神は恥へしからぬ月　鴻巣　柳几

名月や是もはしまる唐の影　兎陵

雨はらみ日和の影やりふの月　柏也

仝　駿河

名月や気に残る花に鞠の丈　翠紅

名月や花よ見るも浅からし　對江

片枝に寄る花を荷やりふの月　楚雲

咲帰や雨へつきおともるの月　月弓

清荻もいとゝ気をかしりふの月　文流

海細や立つ見に遥か乃月　芦川

名月や孫も帽子の頭小春　故川

名月を云ひてや後の立かへる　初紅

一順　　加賀

かゝりける一筋ぬれの月見哉　後川

藻に啼く虫に遠くなる声　如本

饒としに名乗る名も定めかね　孟菱

夜ぬ柱ハ人か須なし　読夕

衆そめハあれなし酒と長くなる　可枝

蔓ともに国に夜ぬ木繁　倚之

小銭を机にのせる昼哉　蘭皐

塚へ森に聲のハ何く　桃筆

名残

名りや徒を兜も家を挟かれ　如本

指さしもなぬちやりふぬ月　芦洲

案いつかふは諸くへ月見れ　可枝

名りや籾へ来や宅山ぬ秋　蘭皐

挿さしく音流と滞やりふぬ月　倚之

昨月に実も寄る玉ぬ枝かれ　読夕

名月や八声の鶏は不二に風　左呈

入かゝる迄へく形の月見哉　蓮市

麻ミのハ帆柱そりきふは月　奇仄

明月や狸の皷ふりくらす　古臺

名月や二十五絃も浙乃糸　射堂

蘆も枯て夢にさゝるやなの月　五菱

一花

名月ちかよとの思ひし朝鳥　麦水

おくれ旅はそらの舟遊　可松

司召角力は市若におしく　帛糸

ま事もれるにもし にと　加草

愛宕にもさゝる敵乃入くれを　蔭由

一具は檐に又ちかの鏈　李晩

来たり名のるに似たり蝶は声　非扶

並ぶ森へ採糺かり橋の露　丁固

名以

名月も風をにくむや庵衣　雉口

大すゝき隠く隣やりよの月　可松

名月やとちへもどき舟を宿　只歩

名月や人も一つれ寄の松　李晩

岩角の雁二声撰やりよの月　丁固

名月や松もちしまてえん麻　氷扶

名月や名れゝ一花木槿垣　萩由

一くもりなをこえんや秋の月　加草

芦もまださけぬ松あれの月　湖舟

待宵や戸もさゝぬ明く室　尼 暫旻

葛ハ雨さふの松りてや夜の月　農布

名の高の茸の暗さ朧月　帛糸

萩の露水へたるや好の月　呈朝

仝

三日月やみなしの飯を程瓢　舎朶

秋田の稲照らしてやりよの月　封卜

名月や芭蕉に暮く雲の巾　楚雀

庭の眼も露や三笠の月と雪　芷琢

名月や掃ともしく松のかけ　女 珈涼

名月や涌く今宵の神まつり　李巴

三ケ月や玉の兎も耳たてり　能州 瞳ゝ

表

手桶一杯汲しや今宵の月　小松 乃露

硯の海のうへそ初雁　風子

草臥ハお撲茶ても君きりく　二峰

星の色も打寄る花聚　琴松

うらむれし家の松風花の水　芦昔

露の葉屋の琵琶ハ行丸　李之

名残

松の月の暁泊に萩や芒原　乃露

芋畑に雨垣鍬や吉の月　風子

名月や闇ハ流きる陰の下　二峰

名月や九輪梢にかゝる松のうへ　東朔

桂の香はゞり鏡やうへの月　琴松

雲折ぬ猿立もありきかの月　芦昔

能にハ志れしの梓や京の月　李之

名月や樗の雲も一ゝふりて　斧友

名月の何のまゝりや秀生う　為水

表

霧立や月にも香のよ白との　枝量

寿く清　松宗のちる序　宇林

月石有の條のうきしく　李澄

浅く以て縁の水柳にかゝり　多々

山の庭うきあらそ汝千沢　素千

望の猫の浅む咲浄　亷上

去比

名月や取尺を照さ奇帯　宇林

乾坤の外に完くやりての月　百史

湖を舟く堤やまつみ月　　鹿上

名月や木槿の垣ぬ盃も旨　　素竹

明月や何里出ても鐘のよ　　菊旨

人事にいも来やせよの月　　李澄

仝

神子も見く柳ゐ夏やりふみ月　　梅下

名月や湖に散てふ紙　　芦船

流れ屋をおく舟に一松やたての月　　文々

名月や舟のうしろへ嬉れ哉　　八嵐

名月や小里の夢こ出　一ツ　　友方

御あるも嫁理てやりふれ月　　舎来

高き名れ数も菓りやまふの月　　自笑

名月や柳の株ハやさきよ　　正以

世の中にまみくらしくふの月　　志石

仝

名月や欲ハ端とも高みゝへ　　山叩

衣

驚くに有の車や秋の空　是宙

きついふ地へ揺れにまれ弱　卜林

菜乳の夢をうるも百まで々　生北

思のこ得ぬも登りつ白ありり　可員

该舍の座りまゐる日所乃上　市園坊

筏へ折り深く小ゐるこ　竹至

吾眠

さしくれ垢もきるるにきよふの月　卜林

人山る舟くりにや東ふれ月　竹至

銘ては嫁の法や月れ所　生北

名りや不満うつるこ里の中　可員

名月よ桟敷もるや衆田れ務　嘯風

名月や旅の座れ店都り　一嵐

新月や深空徒くくるれと　示弓

月の夜や花よおく噂きりくくく　女 千代

一巡　　越中

さゝりや今も低く雲れし　白椎
すれに染し秋の海棠　竹我
黄菊も蜻蛉草は蔦めけく　鳥角
こちら向ても京は山かり　如六
盃蒔も鯨抜とふは宗ゟ悲し　序由
ほそいは茄子まゝに社母見ん　素丁
女子衆も手伝ほし縁下やしき　似松

錦錦も真似る弁比浪や　里嵜
首一つ手足は髪続も汚の白ひ　兜秋
佛の手も口りくめてうき　至泉

名

照月も都淋し前後移　竹我
峯比沿月に見るや萩の露　鳥角
哀あまり浜気も頼れ今朝月　素丁
かつら男のきぬそめしや十六夜　里嵜

行灯や子等も露の夕化粧　至泉

待宵や泣子ねむらる庵の家　似松

白萩の影も痩すらぬの月　兎秋

全

二度迄く月に来坂やに剣の雲　左圭

作句も歎かつくも身入れ　其汀

仕丁も身も忘れけりけふの月　岨邑

何と掃宗旅の髪もよふの月　左圓

名月に淋しきことのや三條の杖　康工

表

在ちら月本様の佳色静かなり　麻文

哭ゑ方に孫　一彩　秋花

冬籠もしと杖も洗ひしく　路由

馬の葉の翁きく嘶ん人　可牧

招く日の毎くさふ乳汁あまり　烏粟

風も菊に於く打原　野邑

名月

名月や茶の舟に菓乃饗　秋花

后の月隣りゝく侍る宿りけり　鳥专

名月や聖の本種も吹く哉　五宙

此一夜重ね見ん月より十三夜　可牧

こゝ数ハ沼よ出るや芋名月　嵐如

名月や小枝も見ゆる峰の杉　杜容

青い実も赤い実もある木間の月　五三

寄手も少く其夜や雨の月　宇乙

名月や此風名に姿も高かゝる　墨十

転る宗ハ不背の玉を以その月　芳洲

名月やそわそこれ荻の声　少年 桃舎

花更も菓よハ無涙の月見かな　白雄

けふ花に転ぶ程まで雨の月　浦朝

芋堀も程よく流るゝ月見かな　維石

柳よハ高きの宮や竹の上の月　少年 舟歩

待宵へ夜ちかく来る柳かな　白絲

鴫立くも月は新たなり此月　星洗

面ふしく草花笛にこりの月　百茂

舟もいろは歌もいろはに月あんじ　宜仙

一竿の露も前後や秋の月　都文

丸傘此舟何あるや名此月　素圓

稲へわらく雀の前こや赤のころ　杜若

霧思ひは家をまとゐやるの月　有来

待宵や見ぬは若子前化粧土　野邑

名月や田に添ふきる名れ池　吏兆

芭蕉葉ふみちらされしとも入りの月　巳千

いざ宵や杉一本をあかむうち　明至

名月し此里も旅の日杖引　左右

まよひ行芽にあり萩の月　路由

仝

ちる形を宵は霧やりよ此月　雲水 浅暁

表

讃岐

合をまつ花もこゑや浦の月　是橋

叢に並てもおもしろし露　滄洲

旅寝の影にも夢の宿遠く　山槐

白き大濤よ夜も更けれ　長禾

石の目をあかきさ涼しく夕涼　琴河

忘まじき月のさけ鐘つきけれ　戸圓

仝

拾ひ散玉や涼しきまの月　畏天

木陰に身を寄せくも鐘　晋山

新草をほめれ角力に勝せく　帆歩

手さきも庭ハ元成　石室　蘇石

けふ背も梅まく展まハ仰に於　漣鳥

枝のやうし白の紫陽花　素来

香は

高き杖の垣ハぬけよりくまの月　山槐

白露に草かろさやりよ此月　帆歩

湖に一枚の雲やちる日月　滄湖

月に澄れうちの心やまよ此月　普山

鳴るぬあるよ波やまかり月　素来

まゆ絨にて玉霊まくけよの月　長禾

秋やあさるも尽によくりよ此月　戸圓

るなくく昼をかつるやまよの月　森石

雲形を引板に字形やくる此月　琴河

波に浮雲八清るをりよ此月　漣塢

一木に氣を捺りやまよの月　畏天

ゑりや昼极きゑさるも康と　是橋

仝

擬寳珠も磨かしりきよ此月　一之

芋堀さ畑を雲月やまよの月　星暁

ゑりや去れ符をさらし　　杭　路合

杉風も学んに調へくりよ乃月　花友

亀の脚くいよしうる長月　吐章

孤石に花を敷やけふの月　其汀

菊咲にゆくりもよしなの月　魯川

名月や硯の海も晴くれ　李赤

涼しさを琵訓さ石やうるの月　朱竿

表

伊豫

海女がまに秋をしめるや月の行　麦邑

塚の渡りの橋に　初汐　野菱

夜人も氷に又位の烏帽子かく　青梔

行かさ里の照まれまり　二筑

後架の傳もとし年のたき　風徐

梅も見しを許りもろし咲　河流

名の

濱萩の影や往中くれの月　更互

せ子はけ珠々二見の浦の月　千條

百草に宵のそよぎやのべの月　志山

吹わけてきくテスや萩の月　于兮

丈基の月や二九のうら　楓山

浦風は吹こ須磨し月は秋　二穂

百ハの滝に外あり朝の月　夜白

手くだれ松もちりや月は高　青梔

猿啼くて嵐山下秋来の月　河流

山の端に嗚さわくて朝は月　末樵

舟よせて波ハちるや磯の月　野菱

康節の悟字にさかや月の眉　呉風

泥亀は合を続や水は月　二筵

草の葉も露に来し来む月秋ハ　其笛

栗柿に猿も机字や月は山　至東

朝月ご運ふや滝は水初嫁　友之

川音に係やおく愛雲の月　松下

風のよは雲さそふや月は秋　風徐

月は織行しまれ秋ハおきりくり　狂平

秀吟　　越後

名月や船も帆の数よまるゝ　霞舟

名月や学寮の硯ハ眠とも　麦呈

猿小屋も浮世の音なかりけり月　北溟

濱荻の影ありしや今宵の月　槐林

古夢はさびかも以ありけの影　斗山

言傳ハ一むしなき月は居　蓮亀

雨晴らすまのや草に月の影　百鳳

人の世の悲嘆もありや月の雲　思柳

よるや月の影なく荘居　龍左

月見うむしのまゝや秋の夕　射柳

折くよの月を魂とも藤の丸　菊弟

こ沼やよき笑はれ月の影　凍魚

その枯ハたゝとしれの月　志竿

月に何すゝしを鳴やきりぎりす　湛水

また宿の月に居待の客もなし　芦帆

伊のゆかりや月を繞ん　とも　濫水

伊やゝ同じ家に眺めし月　梨月

月影を同じこゝろにせりや石の字に　和翠

手摺を指く甲斐なし旅行月　花弄

虎ふすも庵に実や飛まち月　和郷

ことしの旅影や月に艸の露　寸得

各吟

尾張

棲梧の葉や影に庭掃けふの月　常滑　不捨

曇れともさへ照やけふの月　二梅

桐の葉の数々嬉しきけふの月　有之

名月や外にさまよひ旅まくら　洛泉

仝

常陸

庭石も羽三つ揃やけふの月　艸馬

庭池に降るものハ何となる月　草雉

仝

ちるやらき柳をゆれる風かな　艸雨

越中

名月の道も有きり言紀亀　滑川　知十

名月の匠ミ半ま兼ぬる月　杉呈

初椋の戸の志ら（ゑ）へや岸の月　東水橋　露泉

隈もなき秋を志らふや月ぎろう　西水橋　雨琴

芋畑ハ栗山そ走りそ好の月　大井川　波菱

名月や給の冨士も雪の顔　魚津　冬嶺

名月や翌日ハ消れ法るの雪　仝　乙柳

名月の雪見しや放し鳥　放生津　僧　宇尺

雪揉の二億くなれしくもの月　雨砧

穂落の波も叔やらくの月　艸巴

名月や出ろの窓サ子波るの雪　麦五

名月に雲見ん舟より霧吉のむ　都邑

名月や緑の家も窓越て　甫吟

名月や秋の冨士に雲もなし　芫呈

前ときんにかより露らくせるの月　石袖

名月や日本へ来ても山越うへ　兎千

名月や天の河原の汲む時　　東水

追加

佛ハ石に彫られし菊の花　　遠州　麦歩
今ぞ咲桔梗の花に草庵詠　　仝　蓬仙
蝶の来るもりよいに狩やはの庵　　仝　杜宮
文台にちるハ摘る暮を名残　　仝　湖菱
来てみる草の夕白や水引草　　土佐　百和
名残も惜しき月を観　　仝　川布

秋の日もかゝる十八小角豆名残　　仝　鄙雀
玉垣に霧深くや秋庵蝶　　仝　兎由
青めの八柳の限や十八秋　　仝　茂夕
秋風や雨に見るも猶相さん　　仝　帛芝
かんこ鳥の詠に鴨の夕名残　　仝　金青
珠数形にほうまる屑も夕白ら　　仝　烏雪
一鉢ハ隠者の菊の夕名残　　仝　烏林
秋風よ十三降や伴ず詠まて　　仝　菊卮

終

ときも有ハ好ぬ気のせみ啼ら　仝　星因

散柳あらんこの葉をれかう　仝　兎夕

入月のしてひ拍子如きかりそも語も　仝　一硯

芸や睡ま白も一ト曲りし　京　山只

伊勢山田
藤原長兵衛
江戸浅草御堂前
辻村五兵衛
梓行